

昨年度展示のおさらい

遺跡調査に見る山口大学の原風景 1

中世 村落 誕生

山口大学吉田キャンパス統合移転前夜

現在の吉田キャンパスは、豊かな自然に囲まれながらも数多くの校舎や図書館などの建造物が密集し、各種グラウンドや駐車場などが整備されています。また、キャンパス周域に目を向けると、水田は年々減少し、住宅地が増加していることに気づかされます。

山口大学吉田キャンパスは、県内各所に散在していた各学部を統合するため、昭和41年(1966)より造成工事が開始されました。ここで山口大学移転前の吉田地区の風景を確認しましょう(左側パネル)。現在の正門から東門に抜ける道の周囲に数軒からなる集落が確認されますが、一面に田畑が広がっていることがわかります。それでは、この農村風景は何時成立したのでしょうか。

発掘調査成果が語る中・近世の吉田

江戸時代の吉田に関しては、幸運なことに絵図が残されています(左側2枚目パネル)。絵図と山口大学移転前の吉田の景観を見比べてください。両者の間には約200年の隔たりがありますが、ほぼ景観を変えていないことが分かります。発掘調査においても、絵図を追認するかたちで江戸時代以降の土地活用の姿が明らかとなっています。

それでは、この農村風景は何時代に成立するのでしょうか。これまでの発掘調査成果により室町時代の集落は江戸時代と同様に現在の大学本部棟から大学会館周辺、そして動物医療センター周辺の丘陵地に限られて発見されています。この内、動物医療センター周辺に営まれた集落は江戸時代に至る前に消滅しますが、丘陵地に集落を築き、低地に田畑を設け農業を営むという土地活用方法は、少なくとも室町時代には成立していたようです。

